

楽しい暮らしを提案するライフサポートマガジン

沖縄
タイムス

らくら

2007・2008
12・1
月号

Volume.3

レッククックま〜さんレシピ

お正月に作りたいた縁起もの一品

特集 夫婦で過ごすクリスマス

沖縄ぐるり
与那城地区へ
海中道路へ



招福千枝
系辞

Essay

volume.3

地域ツーリズムと 遺伝子



文/株式会社カルティベート代表取締役 開 梨香

人がイキイキと輝き出す瞬間がある。エコツーリズムの考え方をベースにした地域活性化のお手伝いで、本島南部・北部や離島に通い始めて8年余、幾度もそんな場面に出会った。足元にある地域資源(宝)探しのワークショップをしているときもあれば、お客さまをもてなしている最中だったりもする。

そういえば、恩納村にシズちゃんという60代のおネエさまがいる。彼女は本物体験を提供する「沖縄体験学習研究会ニライカナイ」所属の指導者として、修学旅行の生徒たちに沖縄の生活文化体験を提供している。笑顔が素敵なシズちゃんは、年間8万人以上受け入れているニライカナイで一番の人気者。中高生にも「シズちゃん」と呼ばれ(呼ばせ?)慕われている。シズちゃんマジックにかかると、サータアングーやムーチーを作るといわずか数時間で生徒たちに変化が起こる。料理とともに、沖縄方言や行事・風習を教えているシズちゃんは、何をするにも、生徒たちに問いかけ、考えさせる。全員に役割を与える。知らないことを聞かれたら、ごまかさず必ず調べて答える。そんなシズちゃんに会うと、不登校だった子が「先生、明日から学校いく!」と言い出すのもまれではないらしい。一人ひとりに目線を合わせ、全力でかわるシズちゃんに生徒たちは心を開き、パワーを表出させていくのだろう。生徒たちの反応を愛おしそうに思い出しながら、次なるアイデアを練るシズちゃんが目をキラキラさせてこう言った。「こんなに楽しい老後が待っているなんて思ってもいなかった!」。

片や、今年3月に総務大臣賞を受賞し、島を挙げて民泊事業に取り組んでいる伊江島の話も面白い。5年前、初の修学旅行受け入れは東京の高校生だった。「カンク



ロ、ヤマンバ、へそ出し』という出で立ちの女の子たちは、夜遊びはするは、飲酒喫煙はするはで島は大騒動。当然、民泊反対論も出た。ところが数カ月後、先生数人が謝りに来た。その理由は修学旅行から帰った生徒たちが変わったから。彼らは島で怒鳴られた思い出を嬉々として語り、先生方ともコミュニケーションを取り出したのだ。翌年は、校長先生が受け入れ家庭を一軒一軒お礼に廻った。「学校がある限り修学旅行は伊江島」というその高校の変化はめざましい。2年目には『フツ』の服で、3年目には『ジャージ』で、4年目には『制服』でやってきたというから驚いた。しかも、変わったのは生徒や学校だけではない。伊江島の修学旅行の受入れは5年目にして2万人、収入は約2億円、島内の経済循環による波及効果も広がった。さらに、生徒たちを受け入れたことで家族の絆が深まり、離婚寸前だった家庭が円満になった、引きこもりだった息子が明るくなったという声があがったという。「地域も変わった」と、山城克己伊江島観光協会長は「伊江島のヒューマンツーリズム」推進に意気込む。交流は双方向。それぞれに感動がある。変化がおこる。

いったい、何が人に変化を起こさせるのだろう。筑波大学名誉教授の村上和雄先生の言葉をお借りすれば、良い遺伝子にスイッチが入ったということか。人生をより良く生きるには眠っている良い遺伝子をONにすれば良いらしい。それには人との出会いや交流、物事とのふれ合い、出来事との遭遇が効果的とのこと。なるほど。謎が解けた。ならばウチナンチュのチムグルと沖縄の自然・歴史・文化を活かした『地域ツーリズム』は、沖縄が元気になる原動力になりそうではないか。なんだかワクワクしてきた。